

風立ちぬ
起风了

[日] 堀辰雄·著
施小炜·译

風立ちぬ
起风了

[日] 堀辰雄·著
施小炜·译

图书在版编目(CIP)数据

起风了(日汉对照·精装版)/(日)堀辰雄著;施小炜译.

—上海:华东理工大学出版社, 2015.1

ISBN 978-7-5628-4065-7

I. ①起… II. ①堀…②施… III. ①日语—汉语—对照读物

②中篇小说—日本—现代 IV. ①H369.4: I

中国版本图书馆CIP数据核字(2014)第236903号

起风了(日汉对照·精装版)

著 / (日) 堀辰雄

译 / 施小炜

策划编辑 / 王一佼

责任编辑 / 王一佼

责任校对 / 金慧娟

封面设计 / 戚亮轩

出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司

地址: 上海市梅陇路130号, 200237

电话: (021) 64250306(营销部)

(021) 64250875(编辑室)

传真: (021) 64252707

网址: press.ecust.edu.cn

印 刷 / 上海中华商务联合印刷有限公司

开 本 / 787mm×1092mm 1/32

印 张 / 7.25

字 数 / 132千字

版 次 / 2015年1月第1版

印 次 / 2015年1月第1次

书 号 / ISBN 978-7-5628-4065-7

定 价 / 26.00元

联系我们: 电子邮箱 press_wy@ecust.edu.cn

官方微博 e.weibo.com/ecustpress

淘 宝 网 http://shop61951206.taobao.com

华东理工大学出版社



扫描进入手机淘宝网店

目录

序曲 002 序曲 003

春 016 春 017

風立ちぬ 048 起风了 049

冬 132 冬 133

夜 170 夜 171

死のかけの谷 184 死荫谷 185

*Le vent se lève,
il faut tenter de vivre.*

(风乍起。合当奋意向人生。)

PAUL VALERY

じょきょく 序曲

なつ ひ び いちめん すすき お しげ そうげん
 それらの夏の日々、一面に薄の生い茂った草原の
 中で、お前が立ったまま熱心に絵を描いていると、
 わたし まえ た ねっしん え か
 私はいつもその傍らの一本の白樺の木蔭に身を横た
 わたし かたわ いっぽん しらかば こ かけ み よこ
 えていたものだった。そして夕方になって、お前が
 しこと わたし く
 仕事をすませて私のそばに来ると、それからしばらく
 わたしたち かた て あ はる かなた ふち
 私達は肩に手をかけ合ったまま、遙か彼方の、縁
 あかねいろ お にゅうどうぐも かたま おお
 だけ 茜色を帯びた入道雲のむくむくした塊りに覆
 ち へいせん ほう なが
 われている地平線の方を眺めやっていたものだった。
 ようやく暮れようとしかけているその地平線から、反
 たい なにもの う き
 対に何物かが生まれて来つつあるかのように……

ひ あ ご ご
 そんな日の或る午後、(それはもう秋近い日だった)
 わたしたち まえ か え が か た
 私達はお前の描きかけの絵を画架に立てかけたまま、
 しらかば こ かけ ね くだもの か すな
 その白樺の木蔭に寝そべって果物を齧じっていた。砂
 のような雲が空をさらさらと流れていた。そのとき不
 い ど こ かぜ た わたしたち あたま うえ
 意に、何処からともなく風が立った。私達の頭の上
 こ は あいだ のぞ あいいいろ の
 では、木の葉の間からちらっと覗いている藍色が伸
 ちぢ どうじ くさ
 びたり縮んだりした。それと殆んど同時に、草むらの

序曲

那些连绵夏日，当你站在遍地芒草丛生的草原中聚精会神地作画，我便总是横身斜躺在近旁的一株白桦树荫里。于是到了黄昏时分，你搁下画笔来到我的身畔，随之便会有一段时间，我们俩伸手搂着彼此的肩膀，极目远眺天际那唯独周缘镶着茜红色的大团积雨云覆盖下的地平线。从暮色苍茫的地平线边，仿佛反倒有某种生命正待降生一般……

就在这样的一个午后，（那是一个已近秋令的日子）我们俩将你画了半截的画作竖在画架上，躺在那棵白桦树荫里啃着水果。流沙般的云彩拂掠过苍穹。这时，忽然一阵风不知从何处吹来。我们的头顶上，在枝叶间偶一探脸的那一抹湛蓝忽而舒展忽而收卷。几乎与此同时，我们听见草丛里传来了呼的一声物体倒地的声响。好像是我们扔在那里不顾的油画连同画架一道摔倒的响声。

なか なに たお ものおと わたしたち みみ
中に何かがぱったりと倒れる物音を私達は耳にした。
それは私達がそこに置きっぱなしにしてあつた絵が、
が か とも たお おと た のぼ い
画架と共に、倒れた音らしかった。すぐ立ち上つて行
こうとするお前を、私は、いまの一瞬の何物をも
うしな 失うまいとするかのように無理に引き留めて、私の
はな むり ひ と わたし
そばから離さないでいた。お前は私のするがままに
させていた。

かぜ た い
風立ちぬ、いざ生きめやも。

くち つ で き し く わたし わたし
ふと口を衝いて出て来たそんな詩句を、私は私に
もた 靠れているお前の肩に手をかけながら、口の裡で繰り
まえ かた て くち うち く
かえ 返していた。それからやっとお前は私を振りほどいて
た のぼ い まえ わたし ふ
立ち上つて行った。まだよく乾いてはいなかつたカン
かわ ヴィアスは、その間に、一めんに草の葉をこびつかせて
あいだ いち くさ は
しまっていた。それを再び画架に立て直し、パレット・
ナイフでそんな草の葉を除りにくそうにしながら、

「まあ！こんなところを、もしお父様にでも見つ
かつたら……」
まえ わたし ほう む あいまい び しよう
お前は私の方をふり向いて、なんだか曖昧な微笑
をした。

もう二三日したら、お父様がいらっしゃるわ」
あ あさ わたしたち もり なか
或る朝のこと、私達が森の中をさまよっているとき、

你便想立即起身前去，我却硬将你一把拉住，不放你离开我的身畔，仿佛不愿失去眼前这一瞬间里的某样东西似的。你则听任我如此施为。

风乍起。合当奋意向人生。

我将手搭在偎依着我的你的肩头，口中反复吟诵着这行陡然脱口而出的诗句。然后你终于挣脱我，起身离去。尚未干透的画布在此期间已然粘满了草叶。你一面将它重新竖在画架上，用调色刀艰难地剔除那些草叶，一面说道：

“这可好，要是叫父亲瞧见了……”

你扭过脸来望着我，露出略带暧昧的微笑。

“再过两三天，父亲就要来啦！”

一日清晨，我们徜徉在森林间，你突然这么开口说

突然お前がそう言い出した。私はなんだか不満そうに黙っていた。するとお前は、そういう私の方を見ながら、すこし嗄れたような声で再び口をきいた。

「そうしたらもう、こんな散歩も出来なくなるわね」

「どんな散歩だって、しようと思えば出来るさ」

私はまだ不満らしく、お前のいくぶん気づかわしそうな視線を自分の上に感じながら、しかしそれよりもっと、私達の頭上の梢が何とはなしにざわめいているのに気を奪られているような様子をしていた。

「お父様がなかなか私を離して下さらないわ」

私はとうとう焦れったいとでも云うような目つきで、お前の方を見返した。

「じゃあ、僕達はもうこれでお別れだと云うのかい？」

「だって仕方がないじゃないの」

そう言ってお前はいかにも諦め切ったように、私につとめて微笑んで見せようとした。ああ、そのときのお前の顔色の、そしてその唇の色までも、何と着ざめていたことったら！

「どうしてこんなに変っちゃったんだろうなあ。あんなに私に何もかも任せ切っていたように見えたのに……」と私は考えあぐねたような恰好で、だんだん裸根のごろごろし出して来た狭い山径を、お前をすこし先きにやりながら、いかにも歩きにくそうに歩いて行った。そこいらはもうだいぶ木立が深いと見

道。我仿佛不悦似的沉默不言。于是你望着我这副神态，声音微微有些暗哑地，再度开口道：

“那样的话，像这样的散步也不成啦。”

“甭管像怎样的散步，只要想，就能够成。”

我似乎犹自心存不悦，分明感受到你不无忧戚的目光落在我身上，却装出一副更为我们头顶上树梢间那毫无来由的喧呶声夺去了注意力的模样。

“父亲可是不会让我离开他的哟。”

我终于按捺不住，用差不多可算是焦灼的眼神，回视你：

“那就是说，咱俩这就得分道扬镳喽？”

“这不是没有办法吗？”

说罢，你似乎万念俱灰，努力要冲我做出微笑的模样。啊啊，那时候你的面色，甚至连你的唇色，都是何等地苍白！

“怎么变化会如此之大呢？看上去明明是把一切悉数交托给了我的样子嘛……”

我满脸的百思不解，沿着裸露的树根愈来愈多的狭仄山道，让你走在数武之前，步履维艰地走去。那一带看来已入丛林深处，空气冷森森的。随处可见小小的水泽侵蚀进林间来。突然，我的脑海中闪过这样一个念头：

え、空気はひえびえとしていた。ところどころに小さな沢が食いこんだりしていた。突然、私の頭の中にこんな考えが閃いた。お前はこの夏、偶然出逢った私のような者にもあんなに従順だったように、いや、もっともっと、お前の父や、それからまたそういう父をも数に入れたお前のすべてを絶えず支配しているものに、素直に身を任せ切っているのではないだろうか？……「節子！ そういうお前であるのなら、私はお前がもっともっと好きになるだろう。私がもっとしっかりと生活の見透しがつくようになったら、どうしたってお前を貰いに行くから、それまではお父さんの許に今のままのお前でいるがいい……」そんなことを私は自分自身にだけ言い聞かせながら、しかしお前の同意を求めでもするかのように、いきなりお前の手をとった。お前はその手を私にとられるがままにさせていた。それから私達はそうして手を組んだまま、一つの沢の前に立ち止まりながら、押し黙って、私達の足許に深く食いこんでいる小さな沢のずっと底の、下生の羊歯などの上まで、日の光が数知れず枝をさしかわしている低い灌木の隙間をようやくのことで潜り抜けながら、斑らに落ちていて、そんな木洩れ日がそこまで届くうちに殆んどあるかないか位になっている微風にちらちらと揺れ動いているのを、何か切ないような気持で見つめていた。

你会不会就像对待我这个今年夏天才偶然相逢的人也这般温顺一样——不，甚或更有过之——对你的父亲，以及也包括你父亲在内的、始终支配着你一切的人们，也百依百顺呢？……“节子！如果你当真是那样一个人，我大概会更加喜欢你吧。等到我的生活前景再稳定一些，我非去迎娶你不可，而在那之前，你就待在你父亲的身边，就像现在这个样子便好……”

这些话，我只说给了自己一人听，却仿佛要征求你同意似的，猛然抓住你的手。你便听由我抓着它。然后我俩就这么手牵着手，伫立在一湾水泽前，默默无言，心情黯淡地凝视着阳光穿过无数枝条葳蕤纵横的低矮灌木间隙，最终斑斑点点地抵落在小小水泽最底处从生于树木下的蕨类之上。这枝叶间泄露的缕缕阳光直至抵落那里之前，始终在似有似无的微风中摇曳不止。

それから二三日した或る夕方、私は食堂で、お前まえがお前まえを迎むかえに來きた父ちちと食事しょくじを共ともにしているのを見みだした。お前まえは私わたしの方ほうにぎごちなさそうに背中せなかを向むけていた。父ちちの側がわにいることがお前に殆むいんど無意識的いしきてきに取とらせているにちがいない様子ようすや動作どうさは、私わたしにはお前まえをついぞ見みかけたこともないような若い娘わかのように感じさせた。

「たとえ私がその名を呼んだにしたって……」と
私は一人でつぶやいた。「あいつは平氣へいきでこっちを見む向きもしないだろう。まるでもう私の呼んだものではないかのように……」

その晩、私は一人でつまらなそうに出かけて行おこなつた散歩からかえって来てからも、しばらくホテルの人ひとけのない庭にわの中なかをぶらぶらしていた。山百合やまゆりが匂におっていた。私はホテルの窓まどがまだ二つ三つあかりを洩もらしていいるのをぼんやりと見つめていた。そのうちすこし霧きりがかかって來きたようだった。それを恐れおそてもするかのように、窓まどのあかりは一つびとつ消えて行った。そしてとうとうホテル中まくらがすっかり真まっ暗くらになったかと思うと、軽ひらくいきしりがして、ゆるやかに一つの窓まどが開いた。そして薔薇色ばらいろの寝衣ねまきらしいものを着た、一人の若い娘わかが、窓まどの縁ふちにじっと凭よりかかり出した。それはお前まえだった。……

又过了两三日之后的一个傍晚，我在餐厅里找到了正在共进晚餐的你和前来接你回家的父亲。你笨拙地将后背对着我。守在父亲身畔时你差不多是无意之间流露出的神态和举止，让我感觉到你仿佛是一个我从未谋面的陌生女郎。

“就算我呼唤她的名字……”我自言自语道，“大概那丫头也会毫不在乎地对我不理不睬吧。好像根本就不是我在呼唤她一般……”

那一晚，我百无聊赖地独自出门散步归来后，又在旅舍阒然无人的庭院里久久徊徨。天香百合香氛飘溢。我茫然凝望着旅舍两三只犹自灯光漏泄的窗户。须臾，似乎有雾霭冉冉升起。仿佛是对它心存畏惧似的，窗口的灯光一盏盏地熄灭了去，于是整座旅舍终于沉入一片漆黑之中。就在这时，传来吱呀一声轻响，一页窗扇缓缓开启，只见一个身着蔷薇色睡衣似衣物的妙龄女郎凭窗静立。那便是你……

お前達が発って行ったのち、ひごとひごとずっと私の胸をしめつけていた、あの悲しみに似たような幸福の雰囲気を、私はいまだにはっきりと蘇らせることが出来る。

私は終日、ホテルに閉じ籠っていた。そうして長い間お前のために打棄って置いた自分の仕事に取りかかり出した。私は自分にも思ひがけない位、静かにその仕事に没頭することが出来た。そのうちにすべてが他の季節に移って行った。そしていよいよ私も出発しようとする前日、私はひさしぶりでホテルから散歩に出かけて行った。

秋は林の中を見ちがえるばかりに乱雑にしていた。葉のだいぶ少なくなった木々は、その間から、人けの絶えた別荘のテラスをずっと前方にのり出させていた。菌類の湿っぽい匂いが落葉の匂いに入りまじっていた。そういう思ひがけない位の季節の推移が、——お前と別れてから私の知らぬ間にこんなにも立つてしまった時間というものが、私には異様に感じられた。私の心の裡の何処かしらに、お前から引き離されているのはただ一時的だと云った確信のようなものがあつて、そのためこうした時間の推移までが、私には今までとは全然異った意味を持つようになり出したのであろうか?……そんなようなことを、私はすぐあとではっきりと確かめるまで、何やらぼんや

我至今依然能够清晰地回忆起你们离去之后，日复一日始终压迫着我心灵的、那种类乎哀伤的幸福氛围。

我终日在旅舍里闭门索居，并且重新拾起为了你的缘故而抛掷已久的工作。连自己都没有意料到，我居然能够那般平静地埋头工作。未几，一切都移徙进入了另一季节，而就在自己也行将启程离去的前一日，我时隔多日之后出门散步去了。

秋，令林中变得杂乱纷纭、面目全非。残叶稀疏的树木从其枝丫间，让人去楼空的别墅露台探身展露在迢迢的前方。菌类润湿的气味羼杂在落叶的气味里。这出人意料的季节推移，——自与你一别之后，光阴不知不觉之中消逝如飞，令我难禁异样之感。是否在我心中存在着某种确信，觉得我与你被生生拆散只是一时之厄，因而就连这样的时光流逝，于我而言也变得拥有了与迄今全然不同的意义？……对此，在稍后不久我彻底究明之前，一直就已隐隐约约地有所感知。